

六甲おろしの風に乗って

布引支部 神木 哲男

第6回 布 引 (その1)

「布引」といえば、まず第一に「布引の瀧」を思い浮かべることには異論はないでしょう。布引の瀧の歴史は古く、700年頃には、修験道の創始者として知られる役小角が布引の瀧で修行したことが記されています(「瀧勝寺縁起」)。9世紀末には在原行平・業平の兄弟が瀧見物に訪れています(「伊勢物語」)。

京都からも近く、平安時代の貴族たちは、幾度もここを訪れ、多くの歌を残していることはよく知られています。さて、「布引」という名称はどこから来たのか、国語辞典で「布引」の項を引いてみましょう。「(1)布をさらすために広げて張ること。(2)省略。(3)多くの人が引き続いて絶え間のないこと。(4)省略」(『精選版日本国語大辞典』)とありますが、「布引の瀧」の名前は(1)に由来するのは説明するまでもないでしょう。

歌碑が新神戸駅のガードをくぐったすぐ北にある藤原定家の歌、「布引の瀧のしらいと なつくれは たえずそ人の 山ちたつぬる(布引の瀧を見物するために夏が来れば人が絶え間なくこの山路を尋ねてきます)」は、国語辞典の(1)と(3)の二つの意味が巧みに掛けられており、当時の布引の瀧の賑わいを彷彿とさせる歌であることがわかります。少しのちの軍記物語「太平記」にも、「参詣の貴賤布引なりける(参詣の人々が途切れることなく続いている)とあり、「人が布引だ」、「布引のように人が続く」という表現は、新鮮で面白いですね。

平清盛の時代になると、武将たちもここを訪れています。清盛の子・重盛が郎党を引き連れて瀧を訪れたとき、「瀧壺がどれ位の深さか、だれか瀧壺に潜る勇氣のある者はいないか」と、重盛が郎党にけしかけた時、備前国の住人・難波六郎経俊が申し出て、瀧壺に潜りました。経俊は瀧壺の底に達し、竜宮城を見て、戻って来てその有様を重盛に報告していると、突如として雷鳴が轟きわたり、経俊が雷に打たれて死亡、側に血だらけの猫の足が残されていました(「源平盛衰記」経俊布引の瀧に入る事)。布引の瀧が神聖で、勝手に人が潜ったりして汚すことを許さない聖域であるということを示しているエピソードとして受け取ることができるでしょう。

布引の瀧は、下流から「雌瀧」・「鼓ヶ瀧」・「夫婦瀧」・「雄瀧」の4つの瀧からなっており、水源は六甲山系の瀧池で、摩耶山・再度山の水を集めて落下しています(詳しくは別ページの「布引の瀧」の案内地図をご参照ください)。

雄瀧は高さ43メートル、瀧壺の広さは約430平方メートル、深さは約6.6メートル、5段に別れて落下し、それぞれの段に罅(おぼりつ)があります。

罅は、急流を流れ落ちる水と岩石が数10万年かけて造りあげた世界的にも稀な自然現象であるとされています。上から第1孔は瀧姫宮と名付けられ、深さ約6.6メートル、第2孔は白龍宮、第3孔は白髭宮で、深さは第2、第3孔とも第1孔とほぼ同じ、第4孔は白瀧宮で、約5.5メートル、第5孔は五龍宮と名付けられ、深さはかなり浅く1.5メートルです。罅内で丸くなった石が出水時にたまたま流れ出てきたものは「龍宮石」として珍重されるようです。

このように、布引の瀧は古代以来、多くの人々によって、愛でられ、尊重され、神聖な場所として守られてきました。

明治時代までは、今のように裾野から登る瀧道はなく、瀧の東の砂子山(布引山)を経て、さらに山路を登り、茶屋のある上あたりから見物したようです。



瀧池



藤原定家の歌碑



砂子橋(いさごばし)